
エンジェル・フィールド

広河陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エンジエル・フィールド

【Zマーク】

Z0335X

【作者名】

広河陽

【あらすじ】

遠い所に旅立つ異性の友人に、最後に贈る言葉は「」。
恋愛に限りなく近い、男女の絆を描いた切ない物語。

舞台は近未来の宇宙コロニー、SF的設定を散りばめています。

自身のサイト「ふみかばんのぼーむ」より転載したものです。

情報端末^{パソコン}のキーを叩いていたハルジは、モニター右上の時刻表示に目をやると、ＴＶフォンの通話ユニットを手元に引き寄せた。それをきっかけにモニターから視線を外し、軽く右肩を回す。

やりかけの仕事は目処がついた。話を早めに切り上げれば、睡眠時間も朝食も削らなくて済むだろう。

左肩もマッサージしようとすると、ＴＶフォンの呼び出し音が鳴った。

ハルジは間髪入れずに通話ユニットを取り上げた。

通常、フォンに切り替わって相手を映し出すはずのモニターには変化が起こらない。迷惑フォンの可能性をちらりと思い浮かべながら、ハルジはユニットに慎重に呼びかけた。

「……もしもし」

「あ、ハル？ ごめん、こんな夜遅くに。時間の割にはフォンに出るの、早いね。仕事でもしてた？」

「……まあね」

聞き覚えのある声に安堵する^{反面}、その声が予定より高めの声だったので、ハルジは軽い失望を隠してそう応えるのがやっとだった。彼女がハルジにフォンをかけてくる時は、厄介事を抱えている時としても過言ではない。厄介事の込み入り具合に比例して、通話ユニットを持っている時間も長くなる。その面倒が嫌ではなかつたが、他にフォンを待っている時ぐらいは避けたい相手だった。

とは言え、相手は若くて美しい女性だしその上、自分にとつてかけがえのない人もある。嬉しさが湧いてこない筈はない。

一面に無機質な文字の連なりを映すモニターに、ハルジは彼女の華やいだ笑顔を思いの中で投影する。挨拶の言葉が口をついて出た。「サン德拉は元気？ 研究所勤務つて結構ハードだつて、聞いたけ

ど

聞きたい事はあつたが、一ヶ月ぶりのフォンだったのでハルジはまず近況を訊ねる。サンドラは、先程のハルジを真似して答えを返してきた。

「まあね。でもほら、自分で選んだ道だし。後悔はしないよー」
サン德拉が語尾を伸ばすのは、甘えではなく機嫌が良い証拠だ。
「よかつた、よかつた」

「ハルは？ カレリアさんとはうまくいってる？」

カレリアとは、ハルジがフォンを待っている相手の名である。
「それなりに。サン德拉は？」

ハルジはさりげなく訊いたつもりだったのだが、何処かに緊張した響きがあつたのだろう。それを耳聴く感じ取つたサン德拉は、意味深ながらも明るい含み笑いをして続ける。

「私の事なんか心配しないでよ。磯崎さんはあの通り、素敵な人ですから」

「……はいはい」

昔はこんなちょっとしたおのろけもつらやましくて少し辛かったが、今は苦笑と共に受け流せる余裕があった。

しばらくは当たり障りのない世間話が続くだろう。が、今までの経験からハルジは知つていた。サン德拉がこんな映像オフのフォンをしてくる時には、特に重い悩みがある。きっと、悩んで泣き腫らしたか何かした後で、努めて明るい声で話しているのだ。

世間話が途切れ、通話ユニットの向こうでサン德拉が息を飲むのがハルジに感じられた。次の瞬間、彼女は絞り出すような声で苦しそうに言つた。

「あたし、磯崎さんは一緒になれない……」

ひらかた

枚方ハルジとサン德拉・フィオルが研究生として分子遺伝学ラボに配属になつたのは、4年前の秋だつた。

ハルジはごく普通にスクールで学んだので20歳だつたが、サン德拉は飛び級制をフル活用していたので15歳だつた。

そんな努力家が（天才、ではない。もし天才ならば論文によつて、6歳以上であればラボ入りできる特別処置が適応される）分子遺伝学ラボに配属されるのは5年ぶりだったので、サン德拉はちょっとした有名人になつていた。

それも女性（というよりは少女だつたが）といふことで、ラボの研究生や研究員はこぞつて事前にデータを取り寄せており、サン德拉の顔は知られていた。

そんな理由から、サン德拉はラボ配属の顔合わせの時から15歳の少女として周りから扱われたのである。が、それは彼女が望まないことだつた。彼女を同列の大人として扱つたのはハルジだけでサン德拉はそこに、いたく感銘を受けた。

しかしながら、それはハルジがサン德拉の真意を読み取つていたからではない。ハルジはあまり他人に興味を持たない質で、下調べを怠つたのである。

サン德拉は上背があり、まとつている雰囲気が大人びていたので、下調べなどしなければ20歳の女性として充分通じる。普通ならば大変な失礼に当たつただろうことがこの場合は功を奏したのだ。ハルジがサン德拉の年齢を知つたのは、会つてから一週間ほど後だつた。最初はハルジも接し方を変えようかと考えたが、今さら態度を変えるのに不誠実さを覚えたのと、何よりもサン德拉がそれを望んでいなかつたので実行しなかつた。

そして、その事情をサン德拉に話しても彼女の感銘は色褪せなかつたのである。

ハルジは、サン德拉・フィオルをサン德拉と呼んだ。同姓が多いなど仕方ない状況以外では、ごく親しい人しかファースト・ネームを口にしない傾向が強い東洋人エイジアンのハルジにとつて、これは珍しいことだつた。

しかし、サン德拉の愛称の“サンディ”は口にしなかつた。

愛称を呼ぶのは本来は親しみを表す方法であるが、サン德拉にとっては彼女のプライドを傷つけることだと、ハルジは直感したのだ。

サンドラは大洋州人^{オセアニア人}の常として彼の姓でなく名を呼び、友人として愛称の“ハル”を呼ぶ。

が、サンドラが愛称を呼ぶのはこのラボではハルジしかいなかつた。

わざわざ東洋人、大洋州人という単語を持ち出したのには訳がある。最近ではだいぶ混じり合ってきたが、こここの文化はこの二つに大別されるからだ。

極東の島国、日本に端を発する東洋人。

太平洋の南半球に浮かぶ大陸オーストラリアを起源とする大洋州人。

おおよそ東洋人⁶に対し大洋州人¹の割合で人々が暮らすここは、月と地球の間にある重力均衡宙域に浮かぶ5つの衛星都市の一つ、グラウクス。

30年前、日本とオーストラリアを同時に襲つた「隕石の災厄」、隕石が撒き散らしたウイルス、メテオリック・カラミティ（＝MC）は多くの人命を奪つた。だが、致死率98%のMCの洗礼を免れることができた人々が約400万人いた。彼らはMCをそれ以上広げないようにするため、衛星都市という名の牢獄に入る運命を自ら受け入れた。その彼らがハルジやサンドラたちの親以上の世代に当たる。

第2世代が台頭し始め二つの民族は融合してきたが、この区別はまだ無意味ではない。

episode 1 (後書き)

全11回完結の予定。

次回更新予定は2週間後の10月16日です。

ハルジが、映像を切った音声限定のTVフォンをサンドラから受けたのは、4年来の付き合いの中で今回が3度目である。

1度目は初対面から1年が経とうとする夏のこと。

蒸し暑い夜だった。

衛星都市の気候は気象局によって制御されているが、地球環境とあまりずらさないようにするため、時に不快と感じる環境ですら故意に再現する。

学生専用の^{コント}住居複合体の一室で、ハルジが怠惰な空調設備に代つて夜風を入れようと窓を開け放つていると、フォンが鳴った。

通話ユニットを取るとサンドラだった。

その頃には一人は互いにフォンのやり取りをしていたので、別に珍しくはなかった。真夜中という時間も不思議ではなかつた。実験を終えて部屋へ戻るとそのぐらいの時間になることは、よくあつた。音声限定だという以外は、普段と変わらないフォンだった。

サンドラの最初の一聲は、いつものように^{パートナー}共同実験者と上手くいつていないと悩みの告白から始まつた。

彼女のパートナーは閉鎖的思想を持つ^{エイジアン}東洋人だった。彼は、衛星都市で少数である^{オセアニア}大洋州人に一般に根拠のない差別意識を持つており、大洋州人を酷く軽蔑していたのである。

特にサンドラに対しては彼女の才能への嫉妬もあり、傍目からも辛く当たつてているように見えた。が、サンドラが気にかけていないかのように明るく振る舞つていたので、ラボの人間のほとんどはその深刻さに気づいていなかつた。

周りに気づかせないぐらいにサンドラの演技は良く出来ていたとも言えるし、ラボ入りを選ぶほど一つの才能が突出している人間は他人の感情に鈍いのだとも言えた。

だが、気づいてはいるのだが、自分が手を貸すことでもないと見

えないふりを決めこんでいる者が一番多いのではないかとハルジは思っていた。

決して責められることではない。誰彼ともなく救いの手をさしえることはないのだ。

が、それにしても無関心すぎる。

ハルジも、それほど人に偉そには言えない。サンンドラからちょくちょく相談を受けていたので深刻さを知つていただけなのだから。相談されてほおつておけるほど無神経ではなかつたが、ハルジの性格ではこうやってサンンドラの愚痴を聞いて自分が思つていることを彼女に伝え、彼女が最悪の選択をしないように力づけてやるぐらにしか出来ないので。

サンンドラが自分を相談相手に選んだ以上、彼女が最も望んでいるのはそういうことだと思うようにしていた。そうでなければ救いがない。

前向きに愚痴めいたことをひとしきり語つた後、サンンドラはお決まりの台詞を吐いた。

「あたしは自分が大洋州人だつてことに誇りを持つてるから。こんな不当な差別には決して屈しない。戦い抜いてみせるわ」

喋り続けた後なので、一人称が崩れて「私」から「あたし」になつていた。こういうところにムキになるのが年齢相応で、何処となくサンンドラを微笑ましく思つてしまつのが常のハルジだつたのだが、その日は違つていた。

言い方に奇妙な真剣さと自分に言い聞かせるような痛々しい調子が含まれていたので、ハルジは不安になつてしまつたのである。

通話ユーティを片手に持つまま窓辺に歩いて行き、開けていた窓を閉めるとハルジは思い切つて聞いてみた。

「サンンドラが、自分が大洋州人だということに誇りを持つのは良いと思う。俺には誇りを持つことなんか一つもないから、うらやましいぐらいだよ。だけど、それとこれとは話が違わないかな」「どうしたこと?」

フォンの向こうから囁みつくようにサンンドラは言った。

ハルジは努めて落ち着いた口調で続ける。

「俺たち研究生の役目は、研究員から与えられた実験を確實かつ速やかにこなすこと。そのためにはパートナーとの人間関係を円滑にすること。こういうことを言うと悲しくなるけど、人間つていうのは相性があるて、上手くいかない人はどうやっても上手くいかない。そういう時は、お互いの関係を事務的なものに留めて立ち入らないようにする。それが世の中を渡っていく方法の一つじゃないかな」

「あたし、彼に立ち入ってなんかいない」

「いいや、立ち入っているよ。彼の太洋州人に対する感情を改めようとしている」

「……うん、まあ。でも……」

静かに、だが断固としてハルジはサンンドラの言葉を遮る。

「でも、と君は言つけれど、彼だつて根拠なしに太洋州人に悪い印象を持つた訳じやないと思う。理由があるんだよ、きっと。それに今までそうして生きてきたんだ。そう簡単に態度を改めるなんてできやしない。できるなら、もう、そうしているはずだよ」

実際、ハルジはサンンドラのパートナーからそんな話を聞いていた。言つてしまえば、父親の後妻である太洋州人の義母から幼少時に酷い虐待を受けたということだが、一言で片づけられるほど彼の心の傷は浅くはないようだった。

「サンンドラだつて、人にどうしても譲れないものはあるだろ?」

「だけど、それはあたしが負けを認めたつてことじやない?」

「勝ちとか負けとかの単純な問題じやないよ。上手く言えないけど視野が狭いんじゃないかな。サンンドラはもっと聴いはずなんだから、自分でよく考えることをすすめる」

サンンドラの優越感をくすぐつて頭を冷やそつとしたのではない。ハルジは本気でサンンドラの才能を認めていたので、こういうことが当然のように言えるのだ。

もし小細工をしたのなら、サンドラはすぐ見破つて機嫌を損ねてしまう。

ハルジの飾らないやり取りは、サンドラの高ぶった気持ちを鎮めることができた。

「つまり、彼の太平洋州人のイメージに口出しするなってこと?」

「もう少し穏やかな方法があるはずだよ。色々やってみて駄目だったら、パートナー解消願いを室長に出せばいい。でも、それをする前に自分にできることはやつた方が良い」

「うん、判つた……と思う」

先程より幾分か明るい声が返ってきたので、ハルジはほっとした。

「それにしても……」

と言いかけて、ハルジは慌てて口をつぐむ。

「何?」

「いや、いいよ」

ハルジは自分が言いかけたことにそが、サンドラにひどく立ち入ることだと気づいた。

いくら親しい間柄とは言え、ハルジには失礼に思えたので言葉を飲み込んだのだ。が、サンドラはハルジの言葉の端から彼が口にしけたことをつかんでいた。

「どうして私が大洋州人にこんなに拘っているんだろう、って思つていいでしょ」

「けつこう思つていたりする」

妙な言い回しで、気にしていないから、といつゝアンスをハルジはサンドラに伝えたつもりだった。

人が拘つていることには、他人が触れてはならない、その人にとってとても大切なものがしばしば含まれている。そこに拘つていて自分から入り込むほど、ハルジは無神経ではなかつた。

そのちょっとした気遣いもサンドラは感じ取つたようだつた。

「いいよ、教えてあげる。私の秘密」

サンドラはなめらかに続けた。

「私ね、養女なんだ」

episode 2 (後書き)

全11回完結の予定。

次回更新予定は2週間後の10月30日です。

episode 3

「本当の両親は片方が東洋人エイジヤンみたい。でも私、今の大洋州人オセアニア人の両親を愛しているから。だから太平洋州人であることに誇りを持っているのよ」

「それを知ったのはいつ頃？」

サンドラは何でもないことのようにすらすらと答える。

「スクールに入った年だったから、6歳の時。偶然、知つてしまつて。両親……育てのね、には聞けなかつた。隠したがつていたのが判つちやつたから」

出生にまつわる真実は、明かすタイミングが悪いと後々酷いトラブルになつてしまつことがあるが、察するにサン德拉の場合はさほど悪いタイミングではなかつたらしい。ショックが全くなかつた訳でもないだろうが。

「でも、本当の両親のことが知りたくて。25歳になれば自分で調べられるつことは知つていたけど待ち切れなかつた。だから、うんと勉強して分子遺伝学ラボに入ったの」

分子遺伝学ラボにはDNAトレーサーという装置がある。DNA鑑定に用いられる他、研究員になつてEDTAエチレンジアミン四酢酸二ナトリウムを取得すれば、当局の膨大なDNAバンクにアクセスできる。

対象者の承諾さえあれば、そのDNAが何者から受け継がれたのか、つまり生物学上の親を調べることができる。もちろん自分のDNAなら自分が承諾すれば良いのだから、調べるのは容易い。

「飛び級してラボに入れば、うまくいけば18歳で調べられるじゃない？」

研究員になるためには最低3年間は研究生として学ばなければならぬ。

「それじゃ、サン德拉は研究員になるんだ」

「うん、そのつもり。ハルは？」

「働くよ、奨学金返さなきやならないから。そうだ、サンドラにも俺の秘密、教えておこうか」

後から考えると、何故、自分がそんなことを口にしたのかとハルジは首を傾げたくなる。たぶん、秘密をサン德拉から一方的に聞かされるのではなく、分かち合いたかったのだろう。

無言の中に、話したくないなら無理をして話をなくともいい、という雰囲気が感じられた。

ハルジは緊張の為に乾いてくる唇を湿らして、口を開いた。

「俺、孤児なんだ。15歳の時、両親が死んでしまったから」

「……知らなかつた」

「あんまり人に言つことじやない、こんなこと。自分から言つたのは初めてだと思つ」

「実を言つと、私も初めてだつたりして。育ての親も私がこのことに気づいているって知らないのよ」

少しの間、奇妙な沈黙が流れた。奇妙だが互いに居心地の悪さを感じるものではない。むしろ逆だ。

自分がそれを望んだのにもかかわらずハルジは、この時間を打ち切らなければならぬ、と強く思つた。

「こういう時間を幾度も過ごしたら一人は友人でなくなつてしまつ。そんな予感があつた。

どういう形であれ、ハルジが友人としてのサン德拉を失うのは耐え難いことだ。

「……ま、人には秘密の一つや二つはあるつてこと」

自分たちが特別な人間ではない、ということを強調するように言い含める。

自分たちが特別などという妄想とも言える感覺は例えば、他人を前に言い放てる程に肥大してしまつたら最期だとハルジは思つ。そんな人間は社会の中で生きていく資格はない。

社会が、他人が、認めないだろう。排除されてしまふべき行為だ。しかし、それには甘い響きが伴う。同じ意識を持つ者を強く結び

つける。自分たち自身に酔えるのだ。

ハルジは、自分たちは周りと違うという感覚で人との繋がりを強めたくなかった。きっかけとしては許容するが、それだけで築いた繋がりは必ず崩壊する。

だからこそ、サンドラとの繋がりをそういうものに頼るのは絶対に避けたかった。

それに本当に特別な 大部分の人と違うものを持つ者は、そういうことは口にしない。

ハルジはそれを知っていた。

「パートナーのことは頑張りな」

咳払いをすると、ハルジは当てずっぽうではなく、ある程度の根拠からサン德拉を励ます。

「頑張つていれば、そのうち、『いいこと』もあるよ、きっと」

「判つた。ありがとう、ハル」

サン德拉はいつもの元気を取り戻していた。通話ユーニットの向こうのちよつとはにかむような笑顔が目に見えるようだ。

「じゃ、おやすみ

「おやすみなさい」

決まり文句のようになつていてる挨拶をかわして、フォンを切る。

その直後、サン德拉の研究を担当する磯崎という名の研究員から、ハルジはフォンを受け取った。彼はハルジと同じ年で既に研究員だった。彼こそがサン德拉の前に15歳でラボ入りした秀才である。彼からは何度もサン德拉のことでフォンをもらっていた。

磯崎はサン德拉に気がついて心を碎いているようだつた。

ハルジがサン德拉を励ました根拠が彼である。ハルジ以外にも自分が気にかけてくれている人がいたと知つたら、サン德拉はどんなに心強いだろう。

「彼女、君になら話していると思つたんだ」

彼のこの言葉は、ラボ内で他のメンバーからハルジとサン德拉がどのように見られているかを端的に表わしていた。

互いにいちばん心を許せる仲。

だが、二人の態度がさっぱりとしていたので、その関係にそれ以上の感情があると疑う者は誰一人としていなかつた。

ハルジはサン德拉に相談されなければ、彼女が人間関係で悩んでいることは判らなかつただろうから、それなしにこのことに気づいた研究員という職業の人は、それだけ研究生に注意を払うものだと感心していた。

が、磯崎が注意を払っていたのは研究生ではなく、サン德拉・フィオルという一女性だつたのだと気づいたのは少し経つてからだつた。

午後も2時近くに約束した訳でもなく食堂で一緒になつたサン德拉の口から、ハルジは直接聞いた。

「私、磯崎さんとお付き合いするかもしれない」

「磯崎さんつて、磯崎研究員のこと?」

「そう。告白、だと思うけど……された」

「返事は?」

「まだ。でも、なんか私も磯崎さんのこと、ずっと好きだつたみたい」

「なら、いいんじゃない」

「……うん」

向かいに座るサン德拉のかすかな笑みが急に遠くなる。

昼下がりの閑散とした食堂の白いテーブルがやけに光つて見えた。ハルジの体の中に眩しい光が射てきて、心の何処かがゆっくりと麻痺していく。

ハルジがこの時感じていたのは、後から考えれば喪失感だつた。友人に大切な人ができるてその分、自分と接してくれる時間が減るだらうという想いだつた。

その友人が、たまたま彼にとつて初めての、そしてその時唯一の女友達だつたから、激しい感情を味わう羽目になつたのだ、と。

episode 3 (後書き)

全11回完結の予定。

次回更新予定は2週間後の11月13日です。

サンドラからの2度目の音声限定フォンは、1か月前のことだ。

「私、今、提供者と被提供者の研究をしているの」

被提供者はMCの症状が酷く、通称、メディスンと呼ばれる薬無しでは生きていけない人々のことである。

問題はそのメディスンにあって、これがある特殊な遺伝子を持つ人々の血液からしか抽出できないのだ。

その特殊な遺伝子を持つ人々が提供者である。

しかし提供者の数があまりに少ないので、一度、提供者と判明した人は、某所一説にはそこは医療施設が集中する衛星都市、ローネーにあると言われているに収容され、一生血液を採取される生活を送る。

被提供者の中に、稀にだが賜物^{ギフト}と呼ばれる超感覚的知覚（E · S · P）を持つ人間が出現する。

月などの資源採掘の際に絶大な能力を發揮する金属探査者^{メタルダウザー}。

犯罪捜査に欠かせない思念追尾者・情緒感応者^{メモリーシーケンサー・エンパス}。

治安維持に活躍する予兆感知者など。

彼らなしで社会生活を営むことが出来なくなりつつある衛星都市の現状もあり、汎衛星都市連盟当局ではこの問題に手を焼いていると言つ。

どちらにも人権はあり、どちらか一方を優遇することはできないというのが建前だったが、どちらか一方を優遇すれば、提供者、被提供者、衛星都市市民の寄生関係ともいえるバランスが崩れて衛星都市は事実上、崩壊するだろう。

提供者と被提供者の問題は歴史は浅いが、東洋人と大洋州人の問題よりずっと深刻だつた。

提供者や被提供者が生み出された原因は、MCウイルスがもたらした遺伝子の歪み構造があり、それが解析されつつあるという学術

的な話から、美味しい料理を出すパブを見つけたから二人で一緒に行つてみるといい（もう一人は、この頃にはすっかりハルジの恋人と呼べるようになつていたカレリアのことなのだが）ということまで一通り話すと、サンドラは言った。

「あたし、今日、磯崎さんにプロポーズされちゃつた」

「受けた、よな」

言葉とは裏腹にそんな筈はないといつ確信がハルジにはあった。もし受けたのなら、こんな回りくどい方はしないだろ？

思つた通りの返事をサン德拉は口にした。

「まだ。心配事が一つあって、それを片づけてからにしようと思つて。……ハルはカレリアさんに自分の『ご両親のこと、話した？』思わぬ所に話の矛先が向く。お陰でかえつて変に意識することなくハルジは答えることができた。

「と言つうかね、カレリアは知つてゐるんだ。彼女とは孤児の集まりで知り合つたから」

「そつ……か」

疑問というよりは確認の為にハルジは聞いた。

「サン德拉、磯崎氏に話してないの？……その、『ご両親のこと』気まずくなるのを恐れてハルジの歯切れが悪くなる。しかしサン德拉は、そんなことを気にかけることは全くないようだ。

「実はね。話さなきやつてずっとと思ってたんだけど、タイミングを逸したつていうの？　それでここまで来ちゃつたよ」

「いつかは話さなきや」

強い調子でハルジは言った。サン德拉と磯崎ほどの親密な間柄なら、そういうことは、はつきりしておるべきだといつ思いからだつた。

「そんなのハルに言われるまでもないつてば。でもね、早くても来週かな。来週、IDもらえるから。そつしたらDNAトレーサーを使えるの。それから」

「絶対に話さないと」

しつゝぐ念を押しうぎたせいだらうか。サンドラがハルジに反撃した。

「うん。それより、プロポーズされるつていいものよ。ハルも早くカレリアさんにプロポーズしてあげたら？」

ハルジは一瞬、言葉に詰まってしまった。

「……うすうすは考えているんだけど。俺たちにはまだ早いかな、もう少し収入が多くなってから本格的に考えるよ」

「手遅れにならないように」

「いじ忠告、ありがとうございます」

あれほど想つていた磯崎と結婚できないなどと口走るとは。

ハルジには判つた。何か　自分の根本を崩す程の何かが、サンドラの身に降りかかったのだ。

あれから一ヶ月たつた。サン德拉がこんなフォンをかけてきた理由は、DNAトレーサーの結果にあるであろうことは容易に想像がつく。

だが、それをハルジから口にはしない。飽くまでも彼女の口から聞かなければ。

「……サン德拉。話せることだけでいいから話して欲しい。おこがましいけど力になりたいと思うんだ。話してもらえないとい、それもできない」

実際にはどうであれ、サン德拉の心の中では、磯崎は役に立てないことになっている。ハルジがどうにかするしかないだらうし、また、彼はどうにかしたいとも思つていた。

「うん、判つてるんだけど自分でもよく整理がついてなくて。でも、判つてるの。ただ、突然すぎるだけ」

サン德拉の声は揺れている。

「落ち着いて。最初から話してみるといい」

「うん」

2回程、解読不能な声を出しかけて、3回目にサン德拉はやっと

喋り始めた。

「あたし、もらつたIDで自分のDNAを調べてみたの。やっぱり片親は東洋人。父親よ。名前は周東チカシ。母は大洋州人。周東レナ。この母が、育ての父の妹に当たる人だつた」

覚えたての言語を話すように短文を重ねていくサンドラ。動搖していることの表われだ。

「サンドラは伯父さん夫婦に引き取られたんだね」

「そうみたい。それがね、両親のDNA情報が封鎖されていたの。準一級機密」

「準一級……！」

機密の等級の高さに驚いたというのもあったが、その等級がハルジにとつて耳慣れなものであつて最悪の予感がしたから、という方が驚きの声を上げた主な理由だった。

「研究員IDで注釈を見ることができた。あるプロジェクトに参加しているため機密扱い、なんだつて。プロジェクトについては、詳しくはハルにも言えないんだけど」

「エンジエル・フィールド計画のことだろ」

「え！？」

今度はサン德拉が驚かされる番だつた。

「あたしだつてかなり特別な手続きをしてから判つたのに……」

episode 4 (後書き)

全11回完結の予定。

次回更新予定は2週間後の11月27日です。

ハルジはＴＶフォンのモニターが切られていることに感謝した。
今、自分がいかに醜い表情をしているかを知つてはいたが、その表情は消せない。それが出来るほどハルジの心の傷はまだ乾いていなかつた。

そんな情けない自分の姿をサンドラに見られなくて済むのはハルジにとって、とてもありがたかつた。

サン德拉の前ではそういう意味でいつも強がつていいたい。
ハルジは声にだけは激しい感情が出ないように、細心の注意を払いながら言葉を紡ぐ。

「地球のMCウイルス汚染地区、その中でも日本に都市を作り、提供者を集めて住まわせる。ドナー 提供者同志の婚姻によつて血を濃くし、提供者の数を増やして安定的にメディスンを供給するといふ……サンドラ、よく調べられたな。AFプロジェクトそのものは超一級機密なのに」

「このような人権を無視した計画が当局によつて進められていることなど、公には出来ない。

超一級機密にされる所以はそこにあつた。

「あたしにはそれを知る権利があるの。両親が共に提供者だから。AFプロジェクトに賛同した提供者……エンジェルだから」
エンジェルという単語だけで、ハルジにはサン德拉が当局の作成した文書からこの知識を得たことが判つた。

「サン德拉、彼らは自分たちをエンジェルなんて言わない。単に地球上に住む提供者——アーシャンドナーって言つんだ。エンジェルというのは当局が哀れんでつけてくれた美称だからね」

「両親が提供者の場合、その子供が提供者である確率は8割なんだつてね」

「そう。その8割から俺はもれたんだ」

ハルジの声が突如として真剣味を帯びる。

「……俺はエンジェル・フィールドで生まれた。あそこに住めるのは、提供者が技術者だけなんだ。子供は提供者じゃなくても15歳までは居住を許される。衛星都市に移つても両親がアーシアンドナードから、当局から無尽蔵の資金援助が受けられるんだ。本当の意味で生活には困らない。だけど、俺はそれに甘えたくなかったから奨学金を取つたし、こうやって自分で稼いでいる」

「そして、エンジェル・フィールドに戻るために技術者になることを選んだのね」

ハルジはサン德拉に答える代わりに別のこと口にした。

「前、サン德拉に言つたのは嘘なんだ。両親は生きている。会うことは出来ないけど。どちらにしてもサン德拉に嘘をついていたことは変わらない。謝るよ。本当にごめん」

「いいよ別に。機密で喋れなかつたんでしょ」

明るい調子だったサン德拉の声に、一瞬後に堅い響きが混じる。

「……カレリアさんは、本当のことを話してあるのね」

「カレリアも俺と同じ境遇だから、改めて話すまでもなかつた」

ハルジの胸に、サン德拉に対する後ろめたさが湧き起つてくる。

「そう……」

短く応えるとサン德拉はいつたん口ごもり、呴くように続ける。「今なら判るの。あたしが小さい頃、友達に引きずられて遊び半分でDNA検査に行こうとしたのを、親が必死になつて止めたのが」次の言葉はハルジにも予想できた。最も聞きたくなかったことなのだが。

「ハル、私も提供者なの。自分でしたDNA検査の結果だから間違いない。あたし、地球に……エンジェル・フィールドに行く。そうしたら、たくさん人の命を救える。そういうことが出来るんだから、そうした方がいいよね」

「それでサン德拉は満足なのか」

ハルジ自身、驚いてしまつほど叱るような強い語勢に、サンドラは答えない。

「人が自分の能力を生かすのは、いいことだよ。だけどそれが稀な能力の場合、本人の意志にかかわらず選択肢が狭められたりする」「だってエンジェル・フィールドに行けば、ありあまるくらいの援助金が出るんでしょう？ 育ての親にだって恩返しが出来るし、生みの両親にも会つてみたいし……」

「そうされたくないからこそ、君の育てのご両親はDNA検査を受けさせなかつたんじゃないのか？ サンドラ、常識で決まる取るべき道じゃない。君はどうしたいんだ、君は？ 君が、君自身で選ぶんだ。そうじやないと絶対に後悔するぞ」

ハルジにしては珍しくきつい物言いだった。絶対に、などという脅迫めいた言い方はするものではない。特に受け取り側の精神が不安定な場合には。

言葉が不吉な暗示となつて受け取り側を縛り、錯乱に拍車をかけるだけだ。

そんなことは身に染みて判つていたが、ハルジも動搖していた。だが当然ながら、サンドラの動搖はハルジを上回っている。

「怖いの、あたし。だって磯崎さんをあきらめようとしているもの」「磯崎氏は優秀な技術者だ。彼自身が志願すればエンジェル・フィールドに行けるほどのね。心配ない。彼とは離れなくともいいんだ。磯崎氏なら君と一緒に行くことを選ぶよ」

「それが怖い。あたしの選んだ道に彼を巻き込んでしまうのが怖いの。あたしそこまで自信ない。そこまで磯崎さんの人生を曲げる権利なんてない」

サンドラは、もはや金切り声になつていて。感情の波がそのまま声に表れる。

「いいのか？ エンジェル・フィールドに行つたら一度とこっちには戻れない。あそこに行くというのは、そういうことなんだ。磯崎氏と一生別れることになる、会えなくなるんだぞ。そこまで知つて

て言つてゐるのか？」「

しばらくの沈黙。

そして、通話ユーティの向こうでサン德拉の気配が変わったのをハルジは感じた。普通に考えればありえないのだが、この瞬間、ハルジには田の前に彼女がいる時と同じくらい、それを察することができた。

「事実、耳で聞き取れたのはサン德拉がかすかに吐いたため息だけだった。

「それよりハル、あたしと一緒にエンジェル・フィールドに行こう」

episode 5 (後書き)

全11回完結の予定。

次回更新予定は2週間後の12月11日です。

「ね？ ハルは技術者だしエンジェル・フィールド生まれなんだから志願すれば行けるよ、きっと。ね、あたしと一緒にに行こう」
先程まで漂っていた切迫感は一瞬にして消え去った。エンジェル・フィールドに行く、とすっかり決めているらしいサン德拉の話しぶりにハルジは疑問を覚えはするが、サン德拉に呑ませて明るい調子で言う。

「サン德拉、判つてて言つてるよね？ 出来ないんだ。カレリアが……売れないシンガーのカレリアには、エンジェル・フィールドに住む資格がない」

「お見通しなのね。もちろん、そんなの判つてるつてば。原因がカレリアさんにあるだろ？ ことぐらい。冗談よ、冗談。本気で取らないで」

ハルジとサン德拉はフォン越しに微笑みあった。

サン德拉に必要だったのはこれだったのだ、とハルジはしみじみと思う。

確かにこの役は磯崎には無理だ。他の誰にだつて無理だ。ハルジにしか出来ない。

磯崎なら恋人という間柄にあるが故に、こんなことを言われたらサン德拉と共に行くしかない。縛られる自由もあるのだ。それが磯崎とサン德拉にとつては当然だ。

しかし、例えそれが磯崎の本心であつても、彼がついてきてくれるにどんなにサン德拉が嬉しさを感じたとしても、彼女の中の磯崎を巻き込んでしまったのではないかという重みは消せない。

その重みを背負つよりサン德拉は磯崎から離れていくことを選んだ。

友人であるハルジなら、そこに縛られない。
ましてやハルジには彼を縛るべき人が他にいる。

サン德拉が欲しかったのは、彼女を本当に心配していながら自分の生き方を曲げること無く、深刻さを承知しながら同情なしに「冗談をかわせる相手だったのだ。

彼女がその相手に自分を選んでくれ、様々な偶然の働きがあり、ここまで意識しないで役割を果たせたことをハルジはただ、良かつた、と思つた。

考えてみれば、ハルジはサン德拉に「いつ役をふつてくれる」とを最初から望んでいたのかもしれない。

そしていつか二人が離れた時に、お互いの存在ではなく、共有した時間で交わした言葉や抱いた感情が、胸に宿る想いが、時間も距離も超えて萎えてしまいそうになる、互いの生きていくとする力を支えていけるように、と。

笑いの漣が収まるごとに、ハルジはそつと囁くように問ひ。

「……磯崎氏のことは？」

「ん……プロポーズは断つとく。それから『自分を見つめ直すため』旅に出ることにする。いつ帰つて来られる旅か判らないから、新しい人をみつけておいてねって言っておく」

「プロポーズを断るにはずいぶん曖昧な理由だね。彼が納得するかどうか」

「納得も何も来週には私、エンジェル・フィールドに旅立つのよ。手続きはとっくに終わってるもの」

ハルジは目眩を感じた。

サン德拉は相談はするが、その時にはとっくに心を決めていたり行動した後だつたりすることが度々あつた。

おそらく磯崎だったら、彼女が今回のように意図的に秘密にしようとしない限りは、彼女のちょっとした仕草から敏感に察知して、彼女を止めようとするとし、止められるだらう。

ハルジでは感じ取るのも上手いとは言い難いし、サン德拉を止められない。

そこまで彼女に踏み込んでしまうのに抵抗を覚えるし、自分では

サンドラの心を急には変えられないと思う。

サンドラもハルジの言動で自分の行動を急に変える気はないだろう。

だからこそ、ハルジとサンドラは判り合えながらも友人どまりの関係なのだし、感情表現の大部分を会話に頼るからこそ、誰よりも近い所にいるという確信を互いに持てるのだ。

「また突然な……考える時間ぐらい取つておかないと」

「言つても無駄だつて、判つてるよね？」

「もちろん」

そろそろ話が終わりに近づいてきているのをハルジは感じていた。自分から話を切り出すと、大した話題もないのに引き止めてしまいそうになる。それが怖くて自然とハルジの沈黙が増えしていく。ふいに、何を思ったかサンドラが話を切り換えた。

「あたしねー、映像切つたフォンつて好き」

「え？」

あまりの唐突さにハルジはついていけなかつた。

サンドラは突然、話の核心をぶつけるような、こんな話し方をよくする。そんなところも、ハルジはとても好ましく思つていた。

「昔のフォンつて音声だけだつたんだつてね。それつて正解。顔が見えると駄目よ。相手のこと判つた、つて変に安心しちゃうもん。直接会わない限り判りつこないのに。賢い人にとってはね、声だけだつたら色々想像できるし、その分相手のことも思いやれるし、強がるのも顔が見える時より楽だし、いいことづくめだと思う。TV フォンを作つた人には申し訳ないけど

「そうだね」

短いが、サンドラのユニークな着眼点と鋭い洞察力に感じ入つた、それは最高の賛辞のあいづちだ。

話がまた一転する。それこそ話題が尽きてきた証拠なのだが。

「ハル、カレリアさんからのフォン待ちだつたでしょ？」

「あ？…… そう言えば」

ハルジ自身も忘れていたことをサンドラは言い当てる。

軽い驚きの声を上げるハルジに、サン德拉は名探偵よろしく解説

を始めた。

「こんな変な時間にフォンしてすぐ取つてもらえるなんて理由、恋人からのフォン待ちぐらいしかないじゃない。それともなあに、たまたま通話ユニットの上に手を乗せていたとでも言つつもり?」

「言わないけど」

ハルジにしては珍しく拗ねた口調で返す。

表面的には決して甘えではなく、ふざけているのを裝つて。

「ずいぶん不満そうのこと。はいはい、いい加減判つてくれていると思つたけど、あたしは知つてやつてるの。それぐらい判るですよ?」

「まあね」

「だから、そろそろ切るね」

今まで幾度となく繰り返されたいつもの軽口は、今日はサン德拉の一言で終わらせられてしまつ。

そしてこの時間は、永久に失われるのだ。

「うん」

ハルジの返事はいつになく短い。

「それじゃ……」

と言いかけて、サン德拉は付け加えるように言う。

「そうそう。本当は見送りに来てもらおうと思つたんだけど、地球に来る連絡船、いつ出るか教えてもらえなかつたの。指示があるまでお待ち下さい、だつて。来週の今日、あ、もう昨日か……に、このグラウクスを発つのは決まっているんだけど」

サン德拉はハルジに口を挟まれるのを嫌つてゐるかのよつこ、まくしたてる。

「これから引越しどか手続きとかプロポーズ断つたりとか、色々忙しいと思う。フォンをかけられるのも、今日が最後かも」

形は追伸だが、サン德拉はこれをハルジに伝えたかったのだろう。

それが痛いほど判つていながらもなお、ハルジには素つ氣ない応答しか出来ない。

「そう……だね」

「今までありがとう」

「何もしてないよ。俺は」

どんな気持ちを込めて話せば良いか見当もつかないハルジには、無表情な声でそう言うしかなかった。

「いいの。あたしは知つていてるから。ハルはあたしをただの一度も子供扱いしなかつたのに、いつも自分は年上だつて意識してくれたでしょ。そういうのは何もしてないなんて言わない」

それこそが、ハルジがサン德拉にしていた唯一の気遣いだった。今まで伝わつていないので、と思つていただけに、彼女に最後にそう言つてもらえたのは本当に嬉しかった。

だが、今のハルジはその喜びをサン德拉にうまく伝えられない。「サン德拉がそう言つうのなら、少なくとも君の中では真実だ」

フォンの向こうでサン德拉は小さな笑みを浮かべていた。ハルジのそんな纖細な感情表現の仕方をサン德拉は良く知つていた。だからこそ、互いに大切な友人であり続けることを選んだのだから。

「判つてきたじゃない、ようやく。……それじゃハル、おやすみなさい」

「おやすみ、サン德拉」

そうしてフォンはサン德拉から切れた。

ハルジは通話ユニットをおぐのを何となく躊躇つた。

が、それではカレリアからのフォンを受けられないのだという事実によつやく気がつき、通話ユニットを置いた。

episode 6 (後書き)

全11回完結の予定。

次回更新予定は2週間後の12月25日です。

ハルジがパブ「アクアリオ」で磯崎に出会ったのは、そこそこ確率の高い偶然と言えた。

ピアノの調べで満たされたゆつたりとしたその空間は、つい何日か前にサンドラから教えられた場所なのだから。

店の中央には黒光りする年代物とおぼしきグランドピアノが置かれ、ピアノの傍らでは積層分子盤による立体映像の熱帯魚たちが水の無い空間を泳いでいる。

その魚たちの群れの向こうにハルジは磯崎を見た。
カウンターに肘をついていた磯崎は、夜の冷気を伴に店内に入ってきたハルジの姿を認める手招きした。

さしあたつて拒否する理由も思いつかないハルジは、腕時計に視線を走らせて時間に余裕があるのを確かめると、招かれるまま磯崎の隣に腰を落ち着けた。

聞けば、磯崎はサン德拉との待ち合わせをしていると言つ。
ハルジもカレリアと約束をしていたので、お互いに相手が姿を現すまで談笑という形に自然となつた。

二人の前にタンブラーにつがれたウイスキーが出てくる。磯崎が氣を利かせてくれたのだろう。

が、空腹だったハルジは悪酔いを避けるため、一口だけいただくことに決めた。

磯崎も事情は同じらしく一口含んだ後は、タンブラーに手を伸ばそうとしない。

ふと、ハルジの目が磯崎のタンブラーに添つように置かれた小箱に留まつた。

サン德拉からのフォンが脳裏を過ぎていく。質素に飾られたその小さな箱は、リングケースに違いないだろうと推測できたが、ハルジは知らぬ素振りで磯崎に訊いた。

「彼女にプロポーズでもなさるんですか？」

ハルジと磯崎の間で彼女と言えば、サンドラのことだった。

ハルジが磯崎に敬語を使うのは、磯崎が同い年とは言えラボでは先輩だったからだ。

「サンディイが何か言つてたか？」

磯崎は、ハルジが敢えて口にしない愛称で平氣にサンドラを呼ぶ。ハルジは質問に答えなかつた。

プロポーズの相手が、自分に答えを告げる前に他の男に相談していたとあつては気分が良くなからうという配慮があつたからだつた。かと言つて嘘をつくのも躊躇われたので、代わりにハルジは小箱に露骨な視線をそそいだ。

「それ、中身は指環でしょ」

「当たりだ」

照れるよつな、はにかむよつな、笑つてゐるのだと辛うじて判る顔を磯崎はした。

既視感がハルジを襲う。

この表情の作り方はサンドラがよくするものだつた。

「時期的にずいぶん区切りが悪いと思ひますが、どうして今、プロポーズなんですか？」

その疑問はフォンでサン德拉に話を聞いてから、ハルジがずっと抱いていたものだつた。

例えば3ヶ月前、サン德拉が研究生としての期間を終えた頃ならうなづける。

実際、卒業と同時に結婚する例は多い。

「別に“予定外の出来事”に見舞われたから責任を取る、といつことではないんだよ」

磯崎の顔が紅潮して見えるのは、アルコールのせいだけではないだろう。

彼のタンブラーの中身はほとんど減つていなかつた。

ハルジは磯崎に勘違ひをさせてしまつたことに気づいた。

「いえ、そういう意味ではないんです、すみません」

気まずい沈黙が降りてくる。どうやって静寂を破ろうかとハルジが考えあぐねていると、タイミングがいいことに磯崎の方から口を開いてくれた。

「あるプロジェクトに誘われてね、しばらくグラウクスを離れなきやならなくなりそうなんだ。そのプロジェクトにぜひ、彼女も連れて行きたくてね」

「そのプロジェクトはAFと呼ばれるものですか？」

ハルジはカマをかけてみた。すると、磯崎の顔が強張った。
「枚方も知っていたのか？」

驚いたのはハルジの方だったが、ともかく冷静さを保ちつつ、辻棲合わせのため幾つか嘘を重ねていく。

「一応、俺にも当局からの打診がありました。これでも技術者はしきれ、ですから。俺は断りましたが」

打診などハルジにはなかつた。真実を言わなかつたのは、それが機密であり、関係者以外への口外が禁じられているからだ。

エンジェル・フィールドに居住を認められているのは技術者が提供者のみ。提供者にとつてはエンジェル・フィールド行きはほぼ強制だが、技術者にとっては名誉である。

磯崎もその例外ではなく、熱っぽい口調で語り出した。

「あそこは一度行つたらなかなか帰つて来られる場所じゃない。だから、彼女も連れて行きたくて。配偶者なら技術者としての能力にかかるはず連れて行ける。最も、彼女も優秀な技術者だけね」

ここに至つてハルジの良心は痛んだ。

サンドラに偽りを告げたのを思い出したからだ。

ハルジはサン德拉に誘われた時、技術者でも提供者でもなくシンガー志望のカレリアと離れるというのを理由に断つた。

しかし、ハルジがやろうと思えばカレリアとエンジェル・フィールドに戻るのは名目上、可能なのだ。

ハルジとカレリアが婚姻関係を結べばよいのだから。

ただしカレリアはあの場所を心底嫌っていた。

カレリアもハルジと同じく提供者の両親を持ち、エンジェル・フィールドで育ちながらも提供者ではないためにそこを追われたという経験を持つ。

しかも、しこりを残すような良くない追われ方だ。

ハルジはカレリアがエンジェル・フィールドを嫌う理由も承知していたので、今までは戻ることを考えなかつた。

単に、故郷に戻れば戻りたいという程度の気持ちしかなかつたハルジは、カレリアに出会つてからは自分よりカレリアの都合を優先したのだつた。

「AFプロジェクトは機密だから、プロポーズを受けてもらうまで彼女には言えない。受けてもらえたから、別れるまでさ」「言いながらも磯崎は拒否される可能性を考えていないうつだつた。さばけた口調と用意した指環を見れば一目瞭然だ。

しかし、ハルジは磯崎が間違いを犯しているのを知つている。

「そこまで厳密に機密を守らなくても……プロポーズを受けてもらえるという自信があるのなら、機密を話せばいいじゃないですか」ハルジは焦つていた。

話せばなんとかなる。だが話さなければサンドラは。。。

「機密を明かすのは彼女を縛ることにもなりかねない。そういうことなしに決めて欲しいんだ。……試練なんだよ、これは」

取りつく島もない磯崎にハルジは口をつぐんだ。

ハルジは知つていた。

彼女自身が言つていた。

サンドラは磯崎との生活より、エンジェル・フィールド行きを選んだ。

しかも技術者としてではなく提供者として。

それはサン德拉と磯崎の永遠の別れを示していた筈だつた。が、こうなると事情は違つてくる。

二人はそれぞれ別のルートで同時期にエンジェル・フィールド行

きを選んだ。

何という偶然だろう。

二人の縁の強さに脱帽すると共に嫉妬すらしてしまいそうになる。自分とカレリアの間にもそんな偶然が働いてくれるのだろうか。そもそもハルジが嫉妬しているのは、本当にそこなのだろうか。この嫉妬心としか形容できない胸の疼きは、本当にそこから生まれてきているのだろうか……。

episode 7 (後書き)

全11回完結の予定。

次回更新予定は1週間後の1月15日です。

この作品を「お気に入り登録」していただいている方に向けて「活動報告」を書きましたので、よろしければご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0335x/>

エンジェル・フィールド

2012年1月8日22時58分発行